
天使と聖人

はざま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使と聖人

【Nコード】

N6432S

【作者名】

はごま

【あらすじ】

近未来の地球、どこかの街。白人系の淡々とした殺し屋と、ぬいぐるみが手放せない甘ったれ少女。人間愛か恋愛かもわからない初めての感情。ぬるいサイエンス・ファンタジー。（「天使の飼い方」と同じ世界観ですが、スピノフの形なので単体で読めます）

プロローグ

白い猫を大事そうに抱く男。マフィアとも呼べない地下組織の本拠地の中、その姿は妙に浮いていた。口に出しての文句は言わなかったが、まじまじと眺めているのを男はきつと気付いているはずだ。隠す気もない無遠慮な視線に、しかし男は反応しない。ただ黙って猫を撫でているだけだ。

「タケミ」

呼びかけてやつと男は振り向く。無精ひげにおおわれた顔はいくらかやつれて見えた。

「それは何でしょう？」

路上生活の子供の頃、スラム街からの付き合い。フェドートにはタケミの表情から感情を読み取ることは簡単だった。

「大事な、子さ」

しかし、その複雑な感情を理解することはできなかった。

第1話

フェドートの本来の名前はフェドート・チエルノムイルジンという。

物心ついた頃には路上で生活していたので、親からもらった名ではない。ストリートチルドレンで構成されたギャングのような集団の中、兄と呼んでいた人からもらったものだ。リーに会うさらさら前、冬には当たり前のように凍死者がでる街でのことだ。

「かつこいいだろう」

得意げに笑った彼の顔を、フェドートは今でも鮮明に覚えている。生来頭の回転の速いフェドートは、彼がその名をくれるまでに、どれだけ道端の新聞や古書を広い漁り、幾度もの夜を悩み過ごしていたか知っていたのだ。

「おい、フェージャ」

かといって、この長い名前を覚えてくれる相手はほぼゼロに等しいのだが。

「その呼び方はやめてくださいと、何度も申しているはずですが」

「そういうお前は、いつまでたっても堅苦しいしゃべり方をやめねえなあ」

机の上に足を投げ出しているリーは、意地悪く目を細める。長い付き合いだ、いまだにこの男の言動には慣れきれない。

「くせになってしまっているですよ。しょうがないでしょう」

小首を傾げてため息をついてみせると、リーもわざとらしく肩をすくめた。

「じゃあ、しょうがねえなあ。フェージャ」

理屈が全く通っていない。フェドートは今回も押し問答を諦めた。

「本日私を呼び出した本題はなんでしょう？ 早くお話ください」

せつかちな奴だな、とリーはまた目を細める。机の上で足を組み

直す仕草が芝居がかっていて、直立不動のフェドートと対照的だった。

「お前の兄貴がいるだろ、国の警察官をやっている」「デスク横にあるコンピューターの画面を横目で眺めながら、リーは話を切り出す。

警察官とはいっても、実際はマフィアと何の変わりもない。血のつながらない兄弟が警察官と殺し屋についていても、もはや珍しい話でもなんでもなかった。この国はすでに、それほど腐敗しきっていた。

「ええ、おりますが」

「そいつがな、とある富豪の護衛でへまやったらしい。盗賊から一家を守るはずがミスって全滅だよ」

フェドートは相槌をうつ。兄を慕ってはいるが、彼自身はそれほど有能な人物ではないことは知っている。

「そのときに端末も壊しちまって、お前に連絡しようにも番号がわからなくなって、この事務所に連絡してきたらしいがな」

リーがコンピューターの画面を向ける。映像つきのメッセージが再生されて、情けない顔をした兄がフェドートの目にうつった。軽くため息をつく。

「で、だ。この件でなんとか残ったものがあるから、とりあえず落ち着くまでフェージャにあずかってほしいんだと」

「はあ」

「この事務所で預かるわけにもいかねえからな。一応は警察からの預かりものだ。傷ものにしちゃまずいだろ。うちの社員はお前みたいな理性的な紳士サマばっかじゃねえからな」

それは確かにそうですが、とフェドートは首をかしげる。まだるっこしく回りくどいリーの話し方は、要領を得ないわけではないが、最後の言葉まで聞かねばわけがわからない。

「預かりもの、もう届いてるぜ。相変わらずお前の兄貴は、お前の返事を聞くつもりが全くねえな」

鼻で笑いながら、心底楽しげにリーは部屋の隅を顎で指した。デスク横にある書斎への扉。フェドートは少しの音もたてずにその扉に近寄り、開け放つ。

びくりと小さな影が動く。小部屋の中には、ぬいぐるみを力いっぱい抱きしめ、歯を食いしばりながら、こちらを睨みあげてくる12、3ほどの少女が立っていた。

「一族全滅の生き残りのお嬢ちゃんだよ」

酷く楽しげに椅子をまわすリーに、文句を言うべきなのかもわからず立ち尽くした。

第2話

「リラ」

フェドートはクローゼットに向かって呼びかける。3センチほど空いた隙間から、茶色の目が睨みつけるように見上げてきた。

全身で警戒している少女の倍ほどある高さから、フェドートは小さくため息をつく。どうしてこんなものを預かることになったのかいや、ひとえに出来の悪い兄のせいであるが。

「リラ、食事ができた。そこから出てきなさい」

茶色い目をした小さな生き物は、ぴりぴりと目を細めて動こうとしない。テディベアを強く抱きしめたのがフェドートにはわかった。相手の気配を読むすべは、こんなところで役立てるために磨いたわけではないが。

「リラ、」

困り果てたフェドートは、しゃがみこんで少女と目線を合わせる。びくりと怯えて一歩さがったのが見えた。色素の薄いフェドートの目は、しかし常人よりはるかに多くのものを視ることが出来る。

「そう怯えないでほしい。私は君を傷つけるつもりはない。兄からくれぐれもと頼まれたんだ。一口でいいから食べてくれないかい？」

懇願する口調で言って、シチューの皿を差し出す。おいにつられたのか、少女の目が輝いて前のめりになった。

「私と一緒に、夕飯を食べてほしいんだ。嫌かい？」

小首をかしげて、少女の目を見つめる。小動物のように警戒していた子供は、また小動物の単純さで警戒を解いた。

ゆっくりとクローゼットを開け、そろそろと忍び出てくるのを横目で確認し、フェドートは子供の愚かさに感謝すると同時に憐れみを覚えていた。

テディベアと一緒に椅子に座ろうとする少女が、フェドートのサイズに合わせた椅子の足に苦戦しているのを見て、ひよいと抱き上

げて座らせてやる。

「ありがと」

はにかむように笑った子供に、フェドートは笑みを返してやった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6432s/>

天使と聖人

2011年5月26日18時40分発行